

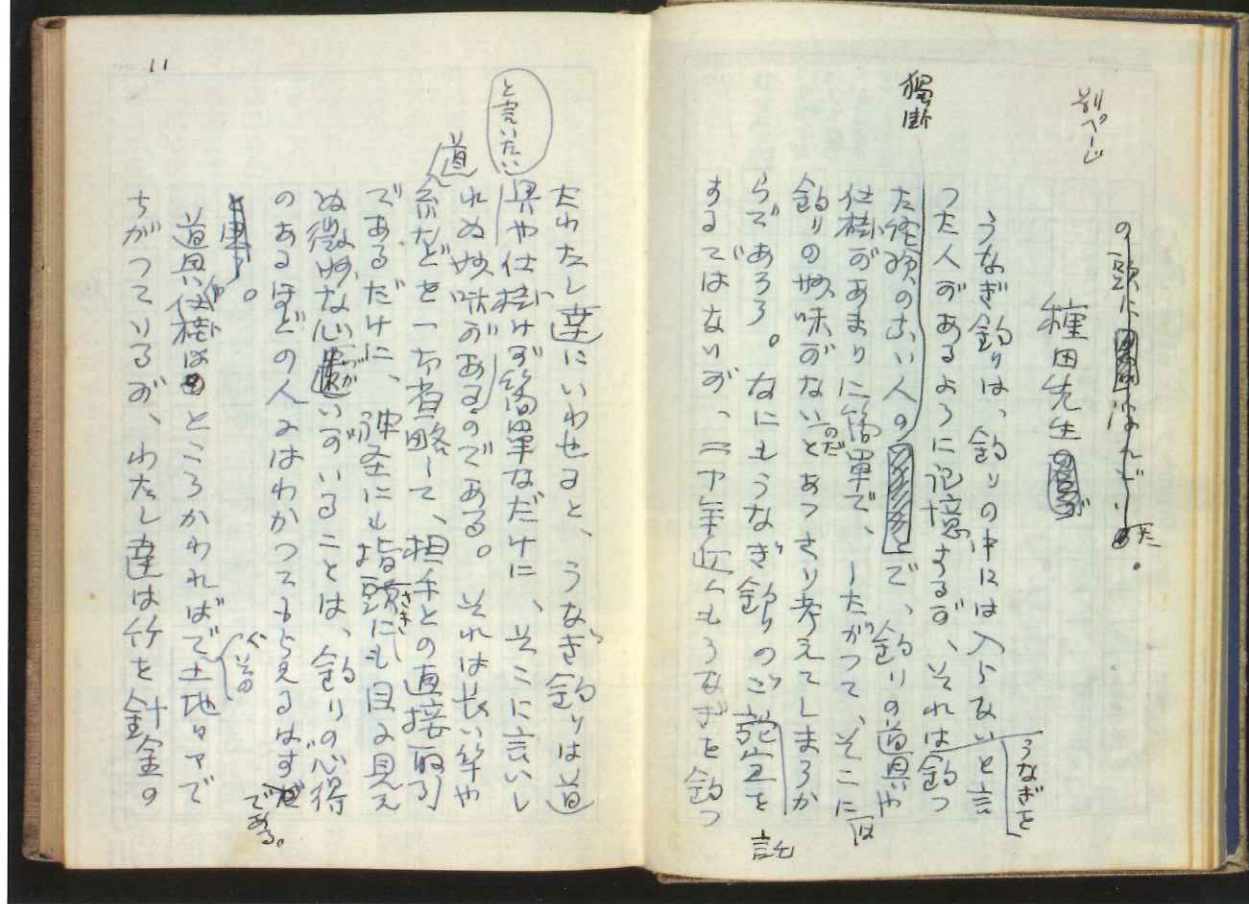


高知県立
文学館

高知県立文学館ニユース

藤並の森

Vol. 58



▲森下雨村のつり随筆『猿猴川に死す』原稿／当館蔵

リレー随筆

本来の川

かくま つとむ

アウトドア雑誌の記者をしていると、今頃決まっ
て受ける質問がある。「子供と川遊びに行きたいが、
穴場はないか」というものだ。私の答えはいつも
同じだ。

「紀伊半島南部か四国の太平洋がいいよ。あの
あたりの川はどこも透明度が高いから気持ちよく
潜れるし、東日本の川より分布する魚種が多い
から楽しい」

そして、必ずこう付け加える。

「一番は高知の仁淀川。ここで魚獲りを体験した
ら、子供の人生が変わる」

仁淀川との付き合いはかれこれ20年になる。

最初に知ったのは森下雨村の『猿猴川に死す』を
通じてで、作中に登場するウナギ釣りの濃密な情
景に憧れた。

夢がかない通ううち、忘れられない出会いを得
た。宮崎弥太郎さんという川漁師である。土佐に
よくいる冗談好きなおんちゃんで、周囲から
弥太さん、弥太さんと呼び慕われていたが、生き物
のことなら学者並みの博識を持つ生き字引だった。
漁とは魚を手玉に取ること。そのために必要なのは
日々の注意深い観察だ。相手の行動が読めれば漁
ほど簡単な仕事はないと、生態学に基づいた魚種

ごとの攻略法を、弥太さんはわかりやすく、
そして面白おかしく解説してくれた。

たとえばアユには多彩な漁法がある。アユ
は警戒心が強く敏捷なことから、世間から賢
い魚だと思われているが、弥太さんに言わせ
れば「獲り方がたくさんあるということ」は、
それだけバカな魚ということとなる。私は
腹を抱えて笑いながら、漁師という観察者が
蓄えてきた知恵の奥行きに感心したものだ。

この話を雑誌に連載すると大人気となり、
記事をまとめた単行本『仁淀川漁師秘伝』も
評判を呼んだ。

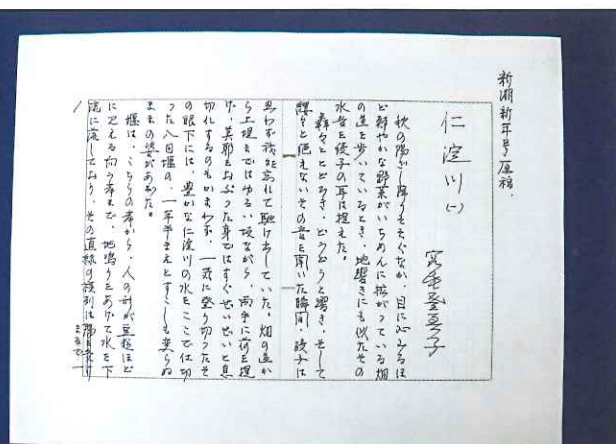
川の健全度をはかる指標はいろいろある
が、川漁師の存在もそのひとつである。漁の
途絶えた川では、川魚を食す伝統文化は消え、
「危険、遊ぶな!」といった看板ばかりが目立
ち、人々は川の流れに背を向けて暮らすよう
になる。

弥太さんはもう亡くなられたが、よい川と
はどのような流れを指すかという視点を私た
ちに遺してくれた。仁淀川には「本来の川」の
見本として、今後その環境的、文化的な姿
を保ち続けてほしい。
(自然系ライター)

川と文学

そんな作品には、自然描写だけではなく、川とともに暮らしている人々の姿やドラマが描かれています。高知を流れる川の作品を読むことは、川とともに生きる人々の日々の喜びや苦悩、そして時の流れを知ることでもあると言えるでしょう。

井伏鱒二、森下雨村、安岡章太郎、宮尾登美子などの数多い川にまつわる文学作品から、高知県の川、そして自然とそこに息づく人々に触れ、今一度高知県の魅力を再発見してみませんか。



▲『仁淀川』原稿／宮尾登美子直筆

I
高知の川と文学

高知県の川を、東部・中部・西部の三つのコーナーに分けて、それぞれゆかりの文学作品を紹介します。

■県東部

東部には、奈半利川や吉野川などの川があります。

奈半利川は、中江兆民が魚梁瀬に魚を食べに旅した時に傍を通ったことが「阿土紀遊」に書かれています。また、紀貫之の『土佐日記』なはのこまりには、土佐から船で帰京するときに、奈半泊に泊まったとありますが、それが奈半利町ではないかと考えられており、奈半利川の河口に近い場所に記念の碑も建っています。

■県中部

中部には、鏡川や物部川など、人とのかわりの深い川が見られます。

■県西部

日本でも数少ない本流にダムのない川で「最後の清流」とも言われる四万十川や、「仁淀ブルー」の言葉で最近注目をあつめ、2010年に水質が全国一位となった仁淀川など、豊かな自然と水量を誇る川が多く見られます。

これらの川を舞台とした文学作品には、四万十川のほとりに住む人々の生きる姿を描いた、笹山久三の「あつよしの夏」などの「四万十川」シリーズや、敗戦後の高知の暮らしを描いた宮尾登美子の『仁淀川』、森下雨村の釣りにまつわる随筆などがあります。

県庁所在地のある都市を流れながらも、比較的良好な河川環境が保たれている鏡川。県都の中心を流れているためか、田中英光の「桜」、土佐文雄の『熱い河』、安岡章太郎の『鏡川』など、多くの作品の舞台となってきました。物部川には、最初の妻と別れた傷心の吉井勇が上流に隠棲していましたし、田岡典夫の『小説 野中兼山』では、兼山が養父の意志を継いで、物部川に山田堰を作ったことが書かれています。また、森下雨村の『猿猴川に死す』で、「猿猴」と言われた横昌義喜さんが、子どもを助けようと「して亡くなった川でもあります」。

II 川に生きる、川をえがく

■高知に生きる人々にとっての川とは

県内の文学同人の人々が執筆した、川を描いた作品を紹介します。短歌、俳句、小説など、あらゆるジャンルにわたった作品群が楽しめます。どの作品も、川とともに生きる高知県の人々のとらえた川であり、よりリアルな「高知県の川」を感じられるコーナーとなっています。



▲「仁淀ブルー」で知られる清流・仁淀川



▲釣具の手入れをする井伏鱒二
(ふくやま文学館蔵)

会 覧 展
紹 介
Exhibition



▲手づくり紙芝居「七夕天女」(文・市原麟一郎／絵・前田和子)

■川の民話

高知県の川にすむ妖怪のエンコウ、平安時代から宮廷に献上されていたという土佐和紙の紙漉きの話、多くの伝説を持つ弘法大師の伝説、淵に住むまものたち……そんなわくわくするような川にまつわる民話が、高知には数多くあります。また、「空の川」である天の川に関連し、七夕にまつわる高知県の変わった風習についてもご紹介しています。

昔の人々がどのように川と関わってきたのか、民話をとおりて感じられるコーナーです。

Ⅲ 川を体験してみよう！

その他、川に親しんでいただくために、さまざまな体験コーナーを設けています。

高知県の川をイメージして作った釣コーナーでは、高知県の川にすむ魚たちのおもちゃを釣って遊べます。桂浜水族館の丸林さんの素敵な魚の切り絵とともに、高知県の川にすむたくさんの生き物たちに出会い、親しめるコーナーです。

他にも、川のせせらぎの中で本が読める読書コーナーや、天の川体験コーナーなども設置しています。

川と文学の調査の中で気づいたのは、川と深く結びついた作品も一方ではあるのですが、近年全般的に川を描く作品が減り、描写も類型的になっていることです。

人の生活の変化にともない、川と人との関わり合いは変化しています。この展覧会が、今後どのように川と向き合うのがベストなのかを再考するきっかけになればと思います。

(学芸課／永橋禎子)

◆関連企画のご案内◆

■記念講演会 「川と私の物語」

福音館書店の編集者として長年児童書の編集に携わり、作家としても活躍されている斎藤先生は、「冒険者たち」シリーズ『ガンバとカワウソの冒険』で、「豊かな流れ」として四万十川を描いています。今回は、川を描いた作品を中心に、先生と川の関わりについてお話いただきます。

日 時：平成 24 年 7 月 1 日(日) 午後 2 時～午後 3 時 30 分頃

講 師：斎藤惇夫先生

場 所：高知県立文学館 1F ホール 定 員：100 名

参 加：要当日観覧券 申 込：電話または文学館受付にて事前申込



■七夕イベント「紙芝居で高知県の七夕を知ろう！」

夜空に広がる川・天の川に関連させて、七夕にまつわる紙芝居を行います。

日 時：平成 24 年 7 月 7 日(土) 午後 2 時～午後 3 時 30 分頃

演 者：市原麟一郎さん他

場 所：高知県立文学館 1F ホール

参 加：無料

申 込：当日、直接会場にお越しください。

■文学散歩「川から海へ～遊覧船で川を体験！」

川を描いた作家ゆかりの地をめぐり、遊覧船で桂浜まで遊覧します。(※船の運休により中止する場合があります)

①鏡川沿いを散策したのち、遊覧船で 90 分のクルーズと昼食をお楽しみいただきます。(大人の方向け)

日 時：平成 24 年 6 月 21 日(木)

集 合：高知県立文学館 1 階ホール 参加費：3300 円(観覧料、乗船料、昼食込み)

申 込：電話または文学館受付にて事前申し込み。(定員 30 名)

②遊覧船で周遊、桂浜荘でのお食事を楽しみ、桂浜水族館で川の生き物や妖怪たちに親しもう！(親子連れ向け)

日 時：平成 24 年 7 月 15 日(日)

集 合：高知県立文学館 1 階ホール

参加費：大人 3900 円、中学・高校生 3500 円、子ども 2000 円(観覧料、乗船料、昼食込み)

申 込：電話または文学館受付にて事前申し込み。(定員 30 名)

■朗読の会「ふるさと川紀行」文学館朗読サポーターの皆さんによる、作品の朗読です。

日 時：平成 24 年 6 月 16 日(土) 午後 2 時～

場 所：高知県立文学館 1F ホール

参 加：無料

申 込：当日、直接会場にお越しください。

☆展示解説

展覧会担当者による
展示解説を行います。

毎週土曜日

各日とも午後 1 時半～
(約 20 分)
参加には当日観覧券
が必要です。
直接会場にお越し
ください。

平成24年
6月9日(土)



7月16日(月・祝)
企画展示室

観覧料400円

川と文学

宮尾登美子の錦と 龍村平藏の美展

加賀乙彦さん・白井進さんによる記念講演会を開催しました。



▲加賀乙彦さんの講演の様子

「宮尾登美子の『錦』と龍村平藏の『美』展」関連企画として、4月29日(日)加賀乙彦さんによる講演会「長編小説の世界」を開催しました。作家として精神科医として活躍の加賀さんは、『フランドルの冬』で芸術選奨文部大臣新人賞、『帰らざる夏』で谷崎潤一郎賞、『宣告』で日本文学大賞、『湿原』で大佛次郎賞、『永遠の都』で芸術選奨文部大臣賞などと数々の賞を受賞しています。昨年は、文化功労者に選定され、今年『科学と宗教と死』が集英社新書から出版され好評を博しています。

加賀さんは、宮尾登美子さんをはじめ安岡章太郎さん、大原富枝さん、倉橋由美子さんといった方々とプライベートな交流もあり、講演では、個々の作家の文学の特色をエピソードを交えて語られ、長編小説については「いろんな物語があつて、その物語がつながらなければならない。それは一つの糸に別の糸とを織り込んでいく織物のようなものだ」と話され、満員の会場は、拍手で包まれていました。

また、5月12日(日)には、(株)龍村美術織物顧問白井進さんに「伝統美を現代に活かすー初代龍村平藏の芸術と技術ー」と題して講演いただきました。白井さんは、初代から4代に渡って仕えられ、ご自身も研究者として、織物の復元に取り組んでおられます。

初代平藏は、若くして織物の発明家として、開発した新しい組織を駆使して意匠に新境地を拓きました。また、古代裂や名物裂などの伝統的な織物を研究し、復元の第一人者として知られることになりました。講演では、平藏が手がけた作品の数々を実資料とともに紹介くださり、会場からは、感動の声をいただきました。

「宮尾登美子の『錦』と龍村平藏の『美』展」のポスター・チラシなどに使用した展覧会名は、水明書道会の理事長もなさっておられる白井進さんに書いていただきました。心よりお礼申し上げます。

(学芸課長／津田加須子)

寅彦資料寄贈

先日、寺田寅彦研究者であった太田文平さん(1916-1999)のご遺族の方より、寅彦自筆の絵画や研究書籍など、たくさん資料をご寄贈いただきました。

太田さんは、静岡県生まれ。日立製作所を退社後、日本大学経済学部教授、名古屋商大教授を務めるかたわら、寅彦の研究を行っていました。「東の太田文平、西の山田一郎」と言われるほど有名な寅彦研究者でしたので、ご存知の方も多いと思います。

寄贈のお話をいただいてから、鎌倉にあった太田さんの家に資料をいただきに伺ったのですが、本棚一段に三重・三重に本が積み重ねられ、しかも寅彦と少しでもかわりのある方の本なら皆集めているといったような徹底ぶり、研究者としての太田さんの姿勢が垣間見られるようでした。

研究者から資料を寄贈いただくことは、その方の研究を引き継ぐことでもあり、身の引き締まる思いがします。

これらの資料は、手続きが済んだら展示する予定です。特に絵画は、『寺田寅彦画集』にも掲載されていなかったものなので、皆さんお楽しみに！

(学芸課 永橋禎子)



▲寅彦自筆の画2点を含め、約500点の資料をご寄贈いただきました。

四万十川のほとり

—— 大江満雄詩碑 ——

猪野 睦

四万十川の赤鉄橋をすこし下った堤防沿いの道路脇に、大江満雄の詩碑が建つたのは1991年4月だった。20年ばかり前になる。

全国から建立基金があつまり、除幕式には東京からも伊藤信吉、伊藤桂一、上林猷夫をはじめ、戦前、戦中、戦後と、ともに日本の現代詩をになった同時代詩人が参加、県内、地元文学関係者とともに、四万十川から吹いてくる風のなかでにぎわった。

この記念すべき除幕式に大江満雄は車椅子で参加、思いのふかいふるさと四万十川に迎えられた。この半年後、85歳で茨城県で亡くなった。宿毛市出身だったが、皆にしたしまった詩の先達だった。

詩碑には1942年「蛾人形」7月号に載せたふるさとに思いをはせる「四万十川」が彫りこまれた。

◀ ふるさとを伝える詩碑



おもうほど おもうほどに
ふるさとと雨と嵐

山峡の水もくろくうて流れあふれる

豪雨の日

天のはげしきを

おもうほど おもうほどに

ふるさとと雨の降る日は美し

四万十川の水のくろくうて日はかなし

この詩を刻んだ碑のそばに並んでこの詩を伝えるように同年、四万十川遭難慰霊碑も建った。まだ四万十川に橋のなかった時代、対岸の具同村へは渡船が唯一の交通手段だった。岡田式渡船といわれ鋼鉄のロープを渡し、それをたぐって水流を利用、斜めに下る渡船だった。

1919年、大雨で水勢増加、川が荒れるなか乗った渡船が転覆、女学生4人、船客6名、それを救助しようとした中学生1名、計11名が濁流に吞まれて犠牲となった。橋のない哀しさだった。「山峡の水もくろくうて流れあふれる」恐ろしさだった。四万十川に念願の赤鉄橋といわれる橋ができたのは、この遭難から11年目の大正時代の終る年だった。

先日たずねたときは、さわやかな5月の風が河川敷から吹き上り、大江満雄詩碑の上にはかぶさるように葛がはい上り、風にすすかにゆれていた。それがまた風格と建立20年の年月を感じさせた。そして側に建つ四万十川遭難慰霊碑と副碑には鎮魂の碑を建てるという「誌」とともに遭難溺死したという殉難学生5名の名が中村高等学校同窓会によって刻まれていた。ともに四万十川を語る碑である。

(詩人)

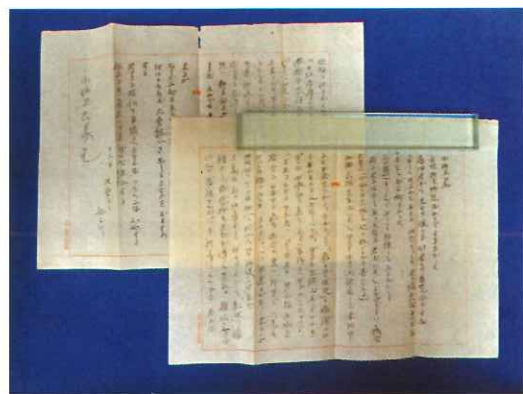
資料受贈報告

—— 寄贈資料から ——

上田庄三郎書簡 小砂丘忠義宛

教育の世紀社原稿用紙2枚

封筒欠 年月不詳18日付(1925年秋頃か)



「：前に君にはなしてあつた様に君がいよく上京するいゝ機会が来た：今回志垣先生がいよくロシアゆきが決定して来月中には出発せられる。それについて「教育の世紀」の編輯の仕事にあたる人がほしいのだ。：どうせ君も思ふ様手腕を振ふのに日本中で最も都合の悪い郷里でいつまでもけんくわ腰でゐてもつまらない。一つ早速とび出して来ないか。：」

「生活綴方の父」として知られる小砂丘忠義は1897(明治30)年旧長岡郡東本山村に生れます。師範学校卒業後、県内各地の小中学校で教師として勤め、生活綴方教育を実践しました。しかし、その教育思想により校長や郡視学などと相容れず、幾度となく転任を余儀なくされていきました。

1925年秋頃、高知県出身で先に上京していた上田庄三郎から右の手紙を受け、教職を辞して12月に上京。

受贈報告(平成24年3月〜5月) 敬称略

- ▼橋井昭六「新潮 第95巻第1号 新潮社刊」(宮尾登美子著「仁淀川」掲載誌他)▼鈴木祐治「マザ・グレースの謎を解く」伝承童謡の詩学——鈴木祐治著「コールサック刊」他▼高知県退職婦人教職員連絡会短歌サークル「早春の譜」第8集 高知県退職婦人教職員連絡会短歌サークル編刊
- ▼秋田稔「探偵随想 第113号 秋田稔著刊」
- ▼九州産業大学芸術学会「九州産業大学 芸術学会研究報告 第43巻 九州産業大学芸術学会編刊
- ▼松本 皎「養笠亭・愚庵・古道入研究 第6号 松本 皎著刊」
- ▼椋鳩十文学記念館賞 全国読書感想文入賞作品集 椋鳩十文学記念館編刊
- ▼高知県俳句連盟・高知県俳句連盟四十周年記念 高知県平成俳句集成 高知県俳句連盟編刊
- ▼小学館「日本の歳時記別冊 俳句への扉 小学館編刊」
- ▼古谷鏡子「命ひとつが自由にて——歌人・川上小夜子の生涯 古谷鏡子著 影書房刊」
- ▼食野雅子「ガフールの勇者たち12 コーリン王 対決の旅 キャスリン・ラスキー原作 食野雅子訳 メディアファクトリー刊」他
- ▼鎌田紳爾「月刊弘前 2月号 第34巻 第2号 木村和生編刊」
- ▼山本靖子「石摺遍路——四国霊場・拓の旅——井上拓歩著 高知新聞社刊」

教育の世紀社の実験校である池袋児童の村小学校に着いた忠義はいよいよ全国に向けての生活綴方運動へと漕ぎ出していくのでした。同月に出された児童の村の冊子「村ダヨリ」に「新しく村に入つて」という題名で忠義の着任の挨拶が掲載されています。

「生き生きとした気持のみなびつてゐるのを見せられてあこがれをもつてゐた所なので自分ながら嬉しさにとび立つ心をどうしていゝかわかりませんでした：教育界に新しい試みとして投げられたこの村の仕事に全分の力をそへさせていただきます。」

東京での新しい仕事に取り組もうとする忠義の澁刺とした様子が伝わってきます。

(学芸課/岡本美和)

このほか、全国の個人・関係機関の方々から図録など数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

小砂丘忠義文庫設置へ



▲小砂丘忠義

「生活綴方の父」として知られる小砂丘忠義（1897～1937）は師範学校卒業後、県内各地の小学校で教師として勤め、生活綴方教育を実践しました。1925（大正14）年12月に上京後は「教育の世紀」「鑑賞文選」（のち「綴方讀本」）や「綴方生活」の編集に携わり、全国の良心的な小学校教師の熱狂的支持を集め、生活綴方の指導と普及に努めました。

忠義は1937（昭和12）年41歳の若さで亡くなりますが、忠義の遺した書簡や草稿、「鑑賞文選」などの膨大な資料はご遺族の手で長く保存され、ご遺族亡き後は忠義の一人娘・夢さんの夫である谷口龍三さんによって武蔵野市吉祥寺の自宅で小砂丘忠義文庫として大切に保存されてきました。

故横川正郎先生、竹内功先生、太郎良信先生のご尽力により小砂丘忠義資料は高知県へご寄贈いただけるお話が進んでいましたが、寄贈が実現する前に谷口さんがご逝去。谷口さんの生前のご意志を引き継ぐ形で2009年に遺族関係者の方より高知県へご寄贈いただき、この度、3,115点にのぼる小砂丘忠義資料の登録・保存等全ての作業を終了いたしました。



▲忠義愛用の眼鏡や絶筆となった句帖など。
右上は中島菊夫画の忠義の似顔絵。

いただいた資料は高知県立文学館において小砂丘忠義文庫として保存し、展示・研究等で活用し県民の皆様にご紹介することはもちろん、全国の研究者の方の閲覧等にご利用いただきたいと思います。

最後になりましたが、寄贈者の岡田節子様、竹内功先生、太郎良信先生はじめ、今回の資料寄贈に関わる全ての皆様に心より感謝申し上げます。

（学芸課／岡本美和）

館長室から

「修善寺の大患」などに思う

元吉 喜志男

「いのちある言葉」をテーマとして3月に開催した「星野富弘 花の詩画展」は、1カ月で8千人を超えるお客様がご来館されました。文学館へも感動の心や高知での開催に対するお礼の声などをたくさんいただきました。

前号のこの欄では、自身の病氣と「感謝の心」について触れさせていただきました。

病氣や大きな怪我などの体験が、人生観などに少なからぬ影響を及ぼすことは少なくありません。文学者の場合も例外ではありません。その象徴的なひとりとして文豪・夏目漱石が思い浮かびます。1910（明治43）年の夏、『三四郎』『それから』に続く前期三部作の三作目にあたる『門』の執筆途中、胃潰瘍の転地療養のために訪れた伊豆・修善寺でさらに病状が悪化して吐血、いわゆる「修善寺の大患」です。病臥したまま綴った子ども達への手紙の文面からは慈愛に満ちた父親としての漱石の素顔が窺えます。この生死の間をさまよった体験は、後期三部作の『彼岸過迄』、『行人』、『こころ』といったその後の作品に見受けられるように、人間の内面的傾向を追求める内容に変化していきます。

晩年の漱石は「則天去私」の境地に至ります。この思いは、先の星野展での「生きているのではなく、生かされているのです」などとも何か重なるものを感じます。作家がどのような健康状態や精神状態の中で作品に對峙したのかに思いを馳せて作品に向かう時、何気ない日常生活の中にあつて「文学とは……」「人間とは……」「人生とは……」「命とは……」等々をより深く考え得るひとときを持てるような気がします。

7月末
より開催!

なばたとしたか絵本原画展

「ナバーランドへようこそ」

高知県立文学館では、毎年、夏休み期間に親子で楽しめる展覧会を開催しています。

今年は絵本「こびとづかん」シリーズで人気のイラストレーター・なばたとしたかさんの原画を一堂に集めた「なばたとしたか絵本原画展」ナバーランドへようこそ」を開催いたします。



「こびとづかん」より ©Toshitaka Nabata



▲なばたとしたかさん (撮影/黒澤義教)

『こびとづかん』(長崎出版)は、草むら、屋内、森の中など至る所に潜む「こびと」たちの生態をリアルに描いた絵本として、続編の『みんなのこびと』『こびと大百科』『こびと観察入門』全て長崎出版刊」とともに、若い世代を中心に高い人気を集めています。

インパクトが強いので、一見してフケ狙いのように思われがちですが、作品の片隅に登場する小さな昆虫や植物にもストーリーがあり、細部まで丁寧に描き出された絵は、子どもの感性に訴えかけ、見るたびに新しい発見をもたらしてくれます。

また、ジャンプをしている時に視線を感じたり、夜中に突然ブーンと冷蔵庫が鳴り出すのは「シンビイエコビト」の仕業というように、設定にはリアリティがあり、子どもだけでなく大人も思わず納得してしまう力があります。これらの作品の背景には、作者であるなばたさんの「身近な自然に触れて探検、発見、探求することの楽しさを届けたい」という暖かい思いが込められています。

展覧会場では、絵本「こびとづかん」シリーズと絵本「いーとんの大冒険」の原画を中心に、「こびと」の生態や特徴を詳しく解説した「こびと大研究」コーナーや、絵本が出来るまでの資料やデッサンなど、パネルを含めて約200点の貴重な資料の紹介をまじえ、なばたとしたかさんが描く世界を一堂に展覧します。この夏は、硬い頭をやわらかくして、思いっきり楽しい「ナバーランド」に飛び込んでみませんか。

(学芸課/福富陽子)



「いーとんの大冒険」より

なばたとしたか
絵本原画展

～ナバーランドへ
ようこそ～

平成 24年 7月28日(土) ▶ 9月17日(祝)

会場：高知県立文学館 2 階 企画展示室 会期中無休!

観覧料：500 円(常設展含) 午前9時～午後5時

※会期中は親子で楽しめる関連イベントも満載!
詳しくは展覧会チラシをご覧ください。



『こびと大百科』より

企画展 案内

井伏鱒二、森下雨村、宮尾登美子などの作品から、高知県の川、そして自然の美しさとそこに生きる人々を通じ、文学の素晴らしさを感じてみませんか。

2012年 **6月9日 土** - **7月16日 月** **祝**

会場 高知県立文学館 2階企画展示室

観覧料：400円 高校生以下無料 会期中無休

開館時間：午前9時～午後5時（入館は午後4時半まで）

文川 学と

展覧会の紹介をしています！詳細は表紙・2・3ページをご覧ください。



『こびとづかん』©Toshitaka Nabata

なばたとしたか絵本原画展 ～ナバーランドへようこそ～

ナバーランドへようこそ！絵本『こびとづかん』『いーとんの大冒険』を生み出した、イラストレーター・なばたとしたかさんの想像力あふれる楽しい絵と物語の世界へお連れします。楽しい関連企画も盛りだくさんです。

会場：高知県立文学館2F 企画展示室 **会期中無休**

観覧料：500円（常設展含）開館時間：午前9時～午後5時（入館は午後4時半まで）

展覧会の紹介をしています！7ページをご覧ください。

高知県立文学館 マスコットキャラクター募集終了！ たくさんのご応募、ありがとうございました！！

高知県立文学館では、高知県の文学に親しみをもちたいと、4月15日（日）～6月18日（月）の期間、マスコットキャラクターを公募いたしました。たくさんのご応募、ありがとうございました。

応募作品は、6月下旬に第一次審査を行い、選ばれた作品を7月20日（金）～9月17日（月・祝）の期間に来館されたお客様に人気投票していただき、9月下旬に最優秀賞（1点）および優秀賞を決定いたします。



最優秀賞

1名 **8万円**

賞状と賞金

優秀賞

数名 **1万円**

相当の賞品

賞状と賞品

参加賞

応募者の中から抽選で
記念品を差し上げます♪

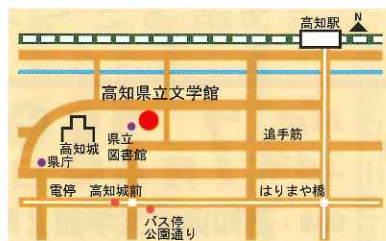
※最優秀賞・優秀賞の賞金は、消費税を含む金額です。ただし、中学生以下が入賞した場合は、同額分の図書カードとします。



利用案内

開館時間 午前9時～午後5時（入館は、午後4時半まで）
休館日 年末年始（12月27日～1月1日）を除き、無休。
※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。
観覧料 一般350円 企画展はそれぞれ異なります。
20人以上の団体は2割引。高校生以下無料、
高知県・高知市長寿手帳、身体障害者手帳、療育手帳、
精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳および被爆者
健康手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。
駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
附帯設備 ホール、ミュージアムショップ、こどものふんがく室、
茶室「慶雲庵」
貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



- 高知龍馬空港より空港連絡バス（朝倉（高知大学前）行または県庁前行）「公園通り」下車 北へ徒歩5分
- JR高知駅下車徒歩20分（またはバス・路面電車を利用）
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分



〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857

E-mail: bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp
http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/